

# 近代人類学における「アイヌ人種論」の諸相

—19世紀から20世紀初頭にかけて—

佐治 美咲

SAJI Misaki

神戸学院大学大学院人間文化学研究科  
地域文化論専攻

**要旨** 本研究は近代欧米における「アイヌ人種論」の諸相を明らかにし、その歴史的意義を検討することを目的とする。先行研究においては、アイヌの人種区分としてコーカソイドを挙げるものがいくつか見られたが、それ以外の言説についてはほとんど言及されない。その一方で、実際には19世紀以降の欧米人研究者が支持した言説にはアイヌをモンゴロイドと考えるものや、アイヌの起源をオセアニアなど南方の地域に求めるものがあるなどのバリエーションがみられるのである。したがって本研究は19世紀から20世紀初頭の欧米において流布した「アイヌ人種論」がどのようなバリエーションを持ったものであったのかを明らかにする。またそれらの背景に、当時の研究から得られていた自然科学的な根拠とは異なる政治的、文化的な要因が存在し作用していた可能性も検討したい。

第1節では19世紀から20世紀初頭に流布した「アイヌ人種論」を総覧し、それらがどのような背景及び根拠に基づいて発表されたものであったのかを詳細に検討する。第2節では20世紀初頭までに発表された「アイヌ人種論」の総覧を行った人類学者の小金井良精とA・F・チェンバレンを取り上げ、彼らがどのような「アイヌ人種論」を唱えたのかを検討する。

「アイヌ人種論」を総覧した小金井、チェンバレンが揃って「アイヌ=コーカソイド説」を支持しなかった背景には、「アイヌ=コーカソイド説」自体が科学的根拠より政治的・文化的要因に支えられていたためではないだろうかとも考えられる。

**キーワード** アイヌ人種論、形質人類学、アイヌ=コーカソイド説

---

## はじめに

本研究の目的は近代、特に19世紀から20世紀初頭にかけての欧米による「アイヌ人種論」の諸相を明らかにし、それらのもつ歴史的意義を明らかにすることにある。

近代欧米においては日本に先駆けてアイヌの研究対象化がおり、いちはやくその人種的起源や形質などに関心が抱かれることとなった。欧米の知識人によって「発見」されたアイヌについて、彼らは人種的起源を模索するさまざまな言説や論文を発表していくのであった。当時、欧米を舞台に盛んに言説が発表されたアイヌの人種的起源やその概念とは一体どのようなものだったのか、またそれらの言説にどのような問題が付随しているのだろうか。

ただし、今日においては「人種区分」自体がユネスコによって明確に否定されているものであ

ることを踏まえなければならない<sup>1)</sup>。科学技術の発展によって集団間のばらつきが観測できるようになったものの、地球上から無作為に選ばれた2人のDNAは99.5%一致するといわれており、人種という概念に生物学的な根拠はない<sup>2)</sup>。したがって人種という概念はその誕生から今日に至るまで社会的な観点から発展してきたといえるのである。

一方で人種分類という概念の萌芽は、寺田によれば古代エジプトにまで遡ることができるという。エジプト第19王朝メンプタ王（メルエンプタハ）の王墓に描かれたエジプト人、セム人、黒人、リビア人の姿が最古の人種分類であるとされている<sup>3)</sup>。すなわち太古から人々は人種に関心を持ち、それらで人々を分類することを繰り返してきたといえよう。

当然だが、人種論や民族論は形質人類学や自然人類学のみで語られるものではない。言語や宗教、また建築、衣装、道具などの物質文化をはじめ、風俗、習慣、伝説などの無形文化も含めた文化総体で語られることが多いものである。そのような整理も必要ではあるが、ここでは人類学史に焦点を絞って論じることとしたい。

ハンス・ディッター・オイルシュレーガーによれば、イエズス会神父による記録の中にアイヌがヨーロッパ人に「発見」された一報があるという。その一報が送られたのは、ポルトガルの冒険家であったフェルニャーオ・メンデス・ピントが日本を発見した1543年のわずか数年後のことであった<sup>4)</sup>。またロテム・コーネルは、アイヌの存在を初めてヨーロッパに知らせた人物はイタリアのイエズス会士ニコライ・ランチロットであったとしている。加えて、それがなされたのはポルトガルに日本が発見された頃と同時期であったとしている<sup>5)</sup>。1548年にランチロットは鹿児島からやってきた日本人逃亡者・ヤジロウから得た情報を用いて、アイヌに接触することなくアイヌに関する情報を交えた報告書を送ったのであった。

また、ハインリッヒ・フォン・シーボルトは『蝦夷島におけるアイヌの民族学的研究』の中で、ロシアの人類学者であったドミトリー・アヌーチンの『東アジアの人類学に関する資料』の文章を踏まえ、アイヌに関する報告を初めて行ったヨーロッパ人のひとりルイス・フロイスであろうと記述している<sup>6)</sup>。このようにしてアイヌはヨーロッパの知識人に「発見」されることとなったのであった。ここで記しておくべきは、ランチロットが報告書の中でアイヌらを「白い」と表現したが<sup>7)</sup>、これはアイヌの人種区分が白人であると考えていたことによるというより、当時のヨーロッパ人が日本人の肌の色をよく白色を用いて表現していたことに起因すると考えるべきであろう、ということである。すなわちこの時点ではヨーロッパ人によるアイヌの人種的起源に関する発言はみられないのである。しかし、1565年のフロイスの報告書の中では、アイヌの長い髪と髭がマスコバイト（ロシア人）と同じであり、コーネルはフロイスが彼らの起源に関係があるのではないかと考えていたことを示唆している<sup>8)</sup>。したがって、これがヨーロッパ人による「アイヌ人種論」の先駆けであった可能性がある。

またヨーロッパの知識人として初めて体系的なアイヌ研究を行った人物として、フィリップ・フランツ・フォン・シーボルトについても述べなければならない。なお、彼の次男であり外交官であったハインリッヒ・フォン・シーボルトについても次節以降で触れるため、父であるフィリップを大シーボルト、子であるハインリッヒを小シーボルトとそれぞれ記すこととする。

1823年に日本へやってきた大シーボルトは、自身が直接アイヌに接触することはなかったものの、日本人探検家の最上徳内よりアイヌに関する知見やアイヌ民具などを入手していた。大シーボルトはアイヌに数千年という長い歴史があり、起源はアムール川流域に存在し、かつては本州を含む日本全域に居住していた、またアイヌ語が現在存在するどの言語とも関連を持たない

と考えるに至ったのであった<sup>9)</sup>。彼は帰国後にドイツ及びオランダにおいてアイヌに関係するコレクションの展覧会を行ったため、これによってジャポニズムの流行とともに、アイヌに関する知識がヨーロッパへ広まった可能性も考えられる<sup>10)</sup>。このようにして遠く離れたヨーロッパの地において「発見」されたアイヌは、ヨーロッパ及びアメリカを舞台としてその人種的起源及び人種区分が長らく議論されていくのであった。

「アイヌ人種論」を取りあげた先行研究においては、近代欧米において流布され広く信じられたといわれる「アイヌ=コーカソイド説」に言及するものが多くみられる。文化人類学者の小谷凱宣によれば、最も早くに「アイヌ人種論」に言及した人物はアメリカの人類学者であるアルバート・S・ビックモアであったとされる<sup>11)</sup>。ビックモアはアイヌがアリア人種の分派を起源とする可能性を指摘し、アイヌの起源はコーカソイドと同じコーカサス地方にあるとして「アイヌ=コーカソイド説」を支持していた可能性を示唆している。また、文化人類学者のヨーゼフ・クライナーは、18世紀末から19世紀初頭にかけて、アイヌに対するヨーロッパでのイメージが「善良ではあるが余り魅力的ではない辺境の民という見方から、高く尊敬される「高貴な未開人」の理想的モデル<sup>12)</sup>に急変したと指摘している。クライナーもアイヌのルーツがコーカソイドにあるという言説の第一人者については不明としたものの、最も古い提唱者のひとりとしてバーナード・J・デイヴィスの名前を挙げている<sup>13)</sup>。一方で、1910年に発表されたブشان編『図解民族学』のなかである著者がアイヌと古アジア民族との関係を確立しようとした、すなわちアイヌの民族的起源をモンゴロイドに求めようと画策したことと、その考えが長らく顧みられることがなかったことについても記述しているのである<sup>14)</sup>。

その他にも自然人類学者の埴原和郎は、イギリスの動物学者ジョージ・バスクが明治維新の直前頃にアイヌの骨がヨーロッパ人の特徴に近いことを示唆したことで、ヨーロッパにおけるアイヌ研究が活発化したことを指摘している<sup>15)</sup>。また自然人類学者の尾本恵一は「古典的人種分類においてはアイヌ=コーカソイド説が最も広く信じられた<sup>16)</sup>と記述している。思想史学者のジョン・ヘネシーは、19世紀末が人種主義者がヨーロッパが飽和していた時代であったとし、「失われた白人部族」といったテーマが文学のテーマによく用いられたと指摘している。また文学のテーマになることで大衆の手に「原始性」という幻想をまとったアイヌ像が浸透し、ヨーロッパ中に知れ渡った可能性がある<sup>17)</sup>。その他、解剖学者の石田肇はアイヌの人種論について「有名なのはハーバード大学のハウエルズや、北海道大学医学部の児玉作左衛門らが唱えた「コーカソイド説」である<sup>18)</sup>とも述べている。

これらの先行研究では、クライナーが「アイヌ=コーカソイド説」に対比するように「アイヌ=モンゴロイド説」が存在していたことを示唆している程度であり、「アイヌ=コーカソイド説」以外の言説を深く論じているものはわずかである。「アイヌ=コーカソイド説」が欧米人研究者の間で定説になっていったと主張される一方で、実は同時代の他の研究者の学説には、「アイヌ=コーカソイド説」以外のものも多く存在するのである。

そこで本稿では同時代の欧米における人類学者らの研究成果や彼らの下した「アイヌ人種論」をもとに、欧米で積極的に探求された「アイヌ人種論」がどのようなバリエーションをもったものであったのかを明らかにしたい。またそれらの帰結についても明らかにすることを試みる。19世紀から20世紀初頭のヨーロッパ及びアメリカに焦点を当てて、その頃の「アイヌ人種論」ではどのような言説が論じられていたのか、それぞれの言説がどのような根拠をもっていたのかを詳細に検討する。加えてなぜ19世紀から20世紀初頭の人類学においてアイヌを白人である

と考える傾向が顕著にみられるのかについても検討したい。

本稿の構成として、第1節では実際に19世紀から20世紀初頭にかけて発表された「アイヌ人種論」についての論文からそのバリエーションと、それぞれの論拠を総覧する<sup>1)</sup>。またそれぞれの学説にみられる傾向についても検討したい。続いて第2説では近代欧米における「アイヌ人種論」の諸言説を総覧した小金井良精とA. F. チェンバレンが、他の研究者による「アイヌ人種論」を総覧した上でどのような「アイヌ人種論」を導き出したのかについて検討したい。

これまで日本においては、「アイヌ人種論」は日本人起源論の文脈の中で語られることがもっぱらであった。そのため本論文では、ヨーロッパで「アイヌ人種論」が盛んに議論された19世紀以降に主眼を置く。またその一方で、日本人起源論と切り離された「アイヌ人種論」と呼ぶような学説は日本国内では小金井を最後に途絶え、ヨーロッパにおいてもチェンバレン以外にこのような議論を扱った論文は確認されていない。したがって本論文で扱う時代は20世紀初頭までとした。

## 1. 「アイヌ人種論」にみられるバリエーションの整理

本節では19世紀から20世紀初頭にかけての人類学者たちが、アイヌの起源及びその人種区分に関してどのような考えを持っていたのか、彼らが著した論文からそれぞれの学説とその根拠を細かに検証したい。

### (1) 1860年代の「アイヌ人種論」

1868年に発表されたアメリカの博物学者アルバート・S・ビックモアによる論文には、彼自身が観察したアイヌの容姿やその風俗が詳細に記述されている。また、森付近で出会ったアイヌ男性2人の体の詳細な測定から得られた数値を論文内に発表している。測定結果についてビックモアは、アイヌはがっしりとした体型のわりに日本人よりも背丈が低く、中国北部の人々の平均身長にも及ばないと記している<sup>19)</sup>。また、「特徴はアーリア人種のスラヴ人分派である髭をたくわえた小百姓を思い浮かばせる」<sup>20)</sup>とも記述している。アイヌが「北トゥラン族 (North Turanian Family) の極端な分派」<sup>21)</sup>である可能性を指摘し、インド=ヨーロッパ民族が中央アジアからイラン高原を通過して西に進んだのと同じように、後にアイヌとなる別の一派は東へ進み日本へ到達したと考えたようである。最後には、アイヌとは古代に隔絶された存在であった彼らの特徴を受け継ぎ今に生きる人々の姿なのではないだろうか、と締めくくっている<sup>22)</sup>。これらのことからビックモアは、アイヌの人種区分はコーカソイドであると考えていたようであり、「アイヌ=コーカソイド説」の最初期の提唱者であったといえよう。

また同じく1868年に発表されたイギリスの海軍軍医であり動物学者でもあったジョージ・バスクの論文では、頭蓋骨の精密な大きさの測定結果が掲載されている<sup>23)</sup>。すなわち、アイヌの文化や容姿に目を向けたビックモアと異なり、バスクは「アイヌの頭蓋骨について」というタイトルからも分かるようにアイヌの頭蓋骨を研究対象とし注視したのである。彼はハクスレー教授から借りたひとつのアイヌの頭蓋骨を用いて、他の民族、人種の頭蓋骨との精密な比較測定を行った。そして得られた数値からアイヌとヨーロッパ人の頭蓋骨には容積、全体量、前頭部、頭頂部において違いがみられなかったことを明らかにした。一方でアイヌの頭蓋骨にみられる後頭部の脛骨突起の位置について、バスクが用いた他の全ての頭蓋骨と異なったことも記した<sup>24)</sup>。以

上のようにバスクは、頭蓋骨の精密な比較測定からアイヌをコーカソイドであると考えたようである。埴原はバスクによってアイヌの骨の特徴がヨーロッパ人に似ていることが指摘されたことがきっかけとなって、ヨーロッパにおけるアイヌ研究が活発化したと指摘している<sup>25)</sup>。

## (2) 1870年代の「アイヌ人種論」

1870年に入るとアメリカの医師であったJ・B・デイヴィスが「ひとつのアイヌ女性の頭蓋骨と同じ人種の3つの男性の頭蓋骨について」という論文において、タイトルのとおり4つの頭蓋骨を用いた比較測定を行った。頭蓋骨のみならずアイヌの葬儀についての記述もしているなど文化、風習についても関心を抱いていたことが分かる。この論文は、後述するアヌーチンやデーニッツらにも引用されており、アイヌの頭骨を用いた実践的な測定研究の先駆けであったと考えられる。デイヴィスによればアイヌが死者に対して深い敬意を抱いていることは既に知られるところであり、アイヌの女性は屈葬の形をとると記されている<sup>26)</sup>。また注目すべきは、中国と日本におけるアイヌの受容についても記述、考察している点であろう。中国と日本の作家はアイヌの「毛深さ」という特性を暗に伝え、特に日本人はアイヌを顕著に野蛮人として表現しているというのである。またその一方で、高度な教育を受けた日本人ほどアイヌを正当に評価しているとも記している<sup>27)</sup>。アイヌの頭蓋骨については、アイヌに隣接する他の民族よりもヨーロッパ人に近いとしたうえで、顔立ちや細長い鼻骨などにヨーロッパ人と区別できる違いがみられるとした。結果としては、注意深く見れば些細な違いは散見されるものの個性の範疇に収まるものであるとした<sup>28)</sup>。ここからデイヴィスも「アイヌ=コーカソイド説」を支持していたと読み取れる。

1872年にフランスの地理学者であったヴィヴィアン・ド・サンマーチンが発表した「アイヌ=南方起源説」とも呼ぶべき学説は、これまでにない新しいものであった。サンマーチンは原初の種族が東アジアの島々にまで拡大したと考え、それはフォルモサ(台湾)、ハイナン(海南島)、日本、蝦夷島(北海道)、クリル諸島などの少なくとも一部にスマトラ、ボルネオ、フィリピン内陸部の人々と同じのような形質をした原住民が存在することに起因するとした<sup>29)</sup>。加えて、日本ではコーカサス的な人相が際立っており、それはモンゴル人と対照的であるとした。蝦夷島とサハリン南部では原住民がアイノスという名前で知られ、髭をはじめとした驚くべき体毛の発達、すなわち毛深さでも知られていると記している<sup>30)</sup>。サンマーチンは原始の種族が分岐し現在の居住域に至ったと考え、台湾や日本を北上し、蝦夷島やクリル諸島へ達した一派と、東へ広がりポリネシアへの居住をはじめた一派であったのだと考えた<sup>31)</sup>。ここから彼の「アイヌ人種論」は「アイヌ=南方起源説」とも呼ぶべきものであったといえよう。

翌年、1873年にはドイツ人医師のデーニッツが「アイヌについてのコメント」を表している。彼は本論文で、アイヌはモンゴロイドであり日本人との違いはチュートン人とローマ人の違いよりも小さいと結論付けている。その一方で、注意深く見れば細かな違いはあるものの、西ヨーロッパ人とアイヌの頭蓋骨に大きな違いは見られないとしたほか、アイヌの頭蓋骨はどのアジア人よりも西ヨーロッパ人に近いとも述べている。また特筆すべきは同じ時代に活発に唱えられていた「アイヌ=コーカソイド説」を踏まえて、なぜアイヌがモンゴロイドではないと考えられたのかについても自身の考えを述べている点であろう。「アイヌ=コーカソイド説」にみられるアイヌの毛深さがヨーロッパ人の多毛性と似ているという言説に対してデーニッツは、アイヌの多毛性が際立っているのは日本人や中国人の体毛の薄さに対比されたことに起因するとして、アイヌよ

りも遙かにヨーロッパ人の方が多毛であると反論している。ただし、ヨーロッパ人とアイヌの体毛はカールしている一方で日本人の体毛はカールしていないなどの類似点は認めているようである。また、アイヌの顔はモンゴロイドに似ていることも示しており、具体的な論拠をもって「アイヌ=モンゴロイド説」を唱えていることがわかる。

1875年にはロシアの人類学者であったM・M・ドプロトウォルスキによってアイヌ語ロシア語辞典が刊行された。彼は5年間サハリンに滞在しており、アイヌと接触する機会を豊富に得た人物であった<sup>32)</sup>。その中に収められた論文集中に「アイヌ人種論」に関する示唆があり、居住地と人口の項では「アイヌは頭蓋の構造では短頭上顎前突人に属し、外見的特徴ではモンゴル系人種に属する」<sup>33)</sup>と記述している。また埴原はデーニツとドプロトウォルスキが「アイヌ=モンゴロイド説」の最初の提唱者であったが、彼らが唱えた後はしばらく顧みられなかったとしている<sup>34)</sup>。バスクやピックモアが「アイヌ=コーカソイド説」の最初の提唱者と考えられていることを踏まえると、「アイヌ=モンゴロイド説」は比較的学説自体の萌芽が遅く、1872年には既にサンマーチンがアイヌの起源を南方の島々に求めていることを考えればこれら3つの学説の中で最も遅く登場したといえる。

続いて1876年にはドプロトウォルスキと同じロシア人の人類学者であったD・アヌーチンが「アイヌ人種論」について記述している<sup>35)</sup>。しかし、同じロシア人研究者であり同時代に活躍したドプロトウォルスキとは対照的に、アヌーチンは「アイヌ=モンゴロイド説」を支持していないようである。アヌーチンは、アイヌの容姿がモンゴル人種に似ておらず、むしろヨーロッパ人に似ているといえるとした一方で、細かく観察するとヨーロッパ人も異なる点があり、どの人種にも属しているといえないという結論に至ったのであった<sup>36)</sup>。ただし、アイヌの中にどう見てもロシア人に似ている人がいることや、髭が長く垂れ下がったアイヌの姿はエストニア人を想起させるとも記されている。アヌーチンはアイヌの人種について決定的な判断を下していない一方で、これまでに発表されてきた「アイヌ人種論」に関するさまざまな他の研究者による文献を全て踏まえて結論を出そうと試みた点に大きな意義があるといえよう<sup>37)</sup>。

1879年には、前述した大シーボルトの次男であり外交官であった小シーボルトが、日本語で著された初めての考古学に関する概説書であるといわれる『考古説略』を出版した。小シーボルトはアイヌ研究のみならず日本人の起源についても研究を行った人物として知られており、東京帝国大学医学部に在籍していたお雇い外国人のE. S. モースの「プレ=アイヌ説」（アイヌ以前に日本列島に居住していたアイヌから見て先住民となる人々（プレ=アイヌ）が日本人の祖先であるとする学説）と対立したことで知られる。日本人の起源はアイヌではないと考えたモースに対して、小シーボルトは父・大シーボルトの考えを受け継いで「日本民族アイヌ起源説」を提唱した。これは、アイヌはかつて日本全域に居住していたと考えた父の考えを継承し、日本人の祖先はアイヌであるとしたものであった<sup>38)</sup>。『蝦夷島におけるアイヌの民族学的研究』の中でも「アイヌは、かつては独立した強力な民族で、数多くの別々の集団に分かれていたことがわかる。しかも彼らは、おそらく日本列島の最初の住民であった」<sup>39)</sup>と記されている。

### (3) 1880年代の「アイヌ人種論」

1880年、イギリスの人類学者であったジョン・ミルンは「アイヌ=南方起源説」の立場から論文を発表した。ミルンは「アイヌ人種論」とは別に、日本人起源論についても立場を明らかにしており、コロボックル説（有名な日本人人類学者・坪井正五郎が唱えた学説とは別だが同じ名称

で呼ばれている)を唱えていた。ミルンはこの学説で「コロボックル」と呼ばれる人々がどのような人物であったのかを明らかにしようと試みたため、「プレ=アイヌ説」を唱えながらもプレ=アイヌと呼ばれる民族の同定までは行わなかったモースに対して、いっそう踏み込んだ研究を行ったといえるものである。ミルンは、千島アイヌをアリュートかカムチャダール由来とし、コロボックルなどと呼ばれた竪穴住民をコシトもしくはコロボックル由来であるとした。またアイヌは貝塚を作り、縄文土器、石器を用いる一方で、コロボックルは竪穴を作りオホーツク土器や石器を用いるとしてその違いを明解にしている。北海道内では竪穴住民、アイヌ、日本人という住民の変遷があったとし、対照的に本州ではアイヌから日本人への入れ替わりしかなかったとして、コロボックルが北上したアイヌに追われてカムチャッカの方へ北上したことを示唆したのであった。ここでミルンは、このような人種交替はヨーロッパの歴史にもみられるものであるとして、例にヨーロッパの民族大移動や南北アメリカの先住民・白人の対立などを挙げており、非常にヨーロッパ的な経験から導き出された考えをしている。したがってこれらの事象から、アイヌの祖先としてニューギニアのパプア人との関係を推測しており、奄美の住人をアイヌとパプア人を繋ぐ壊れた鎖のひとつと表現している<sup>40)</sup>。

1881年には、ドイツの生物学者であったL・H・P・デーデルラインが琉球民族の身体的特徴について琉球民族のなかにアイヌに似た人がいると記しているが、結論を急がないように警告もしている。後述するベルツが人類学的調査からこの事象について確認したところ、アイヌの遺骨から、日本人よりも琉球民族に多くアイヌの血を見つけられる可能性があることを発見した<sup>41)</sup>。デーデルラインに関してはアイヌと琉球、また日本民族の関係についての研究結果について述べられているのみであり、彼がアイヌと他人種の関わりについてどのように考えていたかは明らかではない。

デーデルラインの2年後、1883年にはドイツの医師であったエルウィン・ベルツが「混合人種説」を発表し、後の日本人種論に大きな影響を与えた。そのインパクトは人類学者にも多大なものであったと想像される。ベルツは、本土日本人に「長州タイプ」と「薩摩タイプ」という2種類がありそれらが混合した結果が現在であると考えた<sup>42)</sup>。また、アイヌはモンゴル人よりもヨーロッパ人に近いとして、その根拠に頭骨示数がヨーロッパ人に近いことを挙げている。その他、アイヌは古代から北方に住んでいたため現在の三河がアイヌの古代居住域の南限であるとして、現日本人にアイヌの血はわずかにしか流れていないとしている<sup>43)</sup>。また彼は鎖国時代の出島でも活躍したケンペルや大シーボルトのような日本を対象とする民族学研究者の伝統を受け継いでいた研究者であり、「アイヌ人種論」のみならず日本列島の住民に関する研究や東アジアの諸民族の起源に関する問題にも大きく貢献した人物であった<sup>44)</sup>。

#### (4) 1890年代以降の「アイヌ人種論」

ロシア人解剖学者であったA・タレネツキーは1890年に「シュレンクから頭蓋骨を使って良いと快諾された」として、その頭蓋骨の測定から得られたデータを用いた論文を発表した。この論文が発表された1890年当時、アイヌは蝦夷とサハリン南部、またカムチャッカ沖の2番目の島に居住していると記述され、クリル諸島～カムチャッカ沖の2番目の島～日本本州の南部にも居住していた証拠があるとされている<sup>45)</sup>。カムチャッカ沖の2番目の島については、幌筵島でないかと推察されるものの本論文の記述のみでは詳しくは明らかにできなかった。また、多くの人はアイヌがモンゴル人種であると考えているとまとめており、その中でラ・ペルーズやペシ

エル、グレイなどの研究者の名前を挙げている。

タレネツキーはシュレンクの著作から引用して持論を述べており、シュレンクと同様にアイヌは現在あるどの人種グループにも属しないと結論付けた<sup>46)</sup>。彼はリヒトホーフエンの考えを引用し、中国と韓国の国境には2種類の朝鮮人がおり、そのひとつは蝦夷地アイヌに似ていることから、アイヌは朝鮮半島からやってきて日本列島、蝦夷、サハリン、千島へ渡ったと考えたようである。しかしこの考えは、信頼に足る論拠が確認されておらず、未だアイヌはモンゴル系民族の中で孤立しているとも記述している。

その結果、アイヌの起源について現時点では確固たる結論は出せないとしたうえで、アイヌは古アジア族であるというシュレンクの考えに同意を示す。加えて、アイヌには2タイプあるとして、シュレンクが「アーチ型」と呼ぶ白人に近いタイプと、モンゴル系に近くなったタイプを挙げている。後者は、原種ではコーカサス人に近かったアイヌがモンゴル系と混血した結果生まれたものであるとしている。そのためアイヌはもともと長頭族であり混血によって中頭～短頭の出現がみられ、混血の度合いが上れば上がるほど短頭へ近づいていくと考えたようである。また、1890年において既に蝦夷にもサハリンにも純血のアイヌは存在しないと断言している<sup>47)</sup>。

ここまで時系列順に欧米の研究者による「アイヌ人種論」に関する論文を総覧した結果、「アイヌ人種論」の始まりが1868年に発表されたバスクとピックモアであることが明らかになった。加えて彼らが揃って「アイヌ=コーカソイド説」を支持していたことも興味深いといえよう。これらの論文の発表から数年しか時間を空けず、1870年代に入るとサンマーチンによる「アイヌ=南方起源説」が発表され、デーニッツやドブロトウォルスキによる「アイヌ=モンゴロイド説」、アヌーチンによるどの人種に近いともいえないとする論文が発表され一気に「アイヌ人種論」のバリエーションが増えるのである。

ここで注目すべきは、これらの論文が1868年を皮切りに断続的に発表され続けていたということである。すなわち、東アジアの島々に居住するアイヌが一体何者であるのかという問題を、遠く離れた欧米から欧米人研究者は常に問い続けてきたといえるのである。

## 2. 小金井良精と A. F. チェンバレンによる「アイヌ人種論」

前節ではヨーロッパ及びアメリカの研究者によって19世紀から20世紀初頭にかけて発表された「アイヌ人種論」に関する論文を年代ごとに検討した。その一方で、19世紀末には、既にこれらの「アイヌ人種論」を網羅的に整理した上で、自身の「アイヌ人種論」について著した研究者が存在した。それが小金井良精と、アレクサンダー・フランシス・チェンバレンである。そこで本節では小金井、チェンバレンに注目し、彼らが他の研究者の「アイヌ人種論」をどのように踏まえて結論を導き出していたのかについて検討したい<sup>ii)</sup>。

### (1) 小金井良精による「アイヌ人種論」

コーネルとウォルターは、日本における人類学とは植民地支配を免れた非白人近代国家という特殊性を反映するものであるという。また、日本は明治維新後に近代国家への歩みを進める中でドイツをモデルとして、日本にドイツ人医師を招き数千人という日本人留学生をドイツへ送り出

してもいた<sup>48)</sup>。植民地支配という干渉を回避した一方で、自国の発展のために諸外国の文化、科学、技術など様々なものを取り入れつつあった特異な時代の中で、「アイヌ人種論」はどのように研究されたのであつたらうか。

日本人の自然人類学者である小金井良精（1858-1944）は、1872年に東京医学校、後の東京帝国大学医学部へ入学し、人類学者でもあつた W・デーニッツより解剖学を、E・ベルツからは病理学と婦人科学を学んだ。1868年から1914年までドイツに留学しており、ドイツでは H・ワイダイエルに師事して解剖学を学んだ<sup>49)</sup>。日本へ帰国した後はワイダイエルから学んだ形質人類学的な研究方法を日本で実践し、それに必要とされたアイヌの頭蓋骨をさまざまな方法で大量に入手し、またアイヌの協力を仰ぎ、北海道で100名以上の計測を行ったのであつた<sup>50)</sup>。

小金井がドイツで学んだドイツの人類学者 H・ワイダイエル（1836-1921）は、ドイツ人類学の中心的組織であつたドイツ人類学会で長年に渡って会長を務めた人物であつた。ワイダイエルは、頭蓋骨と頬の骨の精密な測定から人種の推定が可能であるとして、この人種推定方法に説得力を持たせた。そして、人間には識別可能なタイプが存在しそのタイプは変わることはない人間の本質であり、すなわちそれが人種であるとした<sup>51)</sup>。小金井はこの人種推定の方法を日本へ持ち帰り、日本においていち早くアイヌの頭蓋骨の精密な測定を利用した研究を行ったのであつた。

小金井はアイヌが人類学者から関心を集めた理由として、アイヌの外見には特異性がありその特異性がさまざまな研究者や旅行者から関心を集めたと記述している<sup>52)</sup>。ここでいう旅行者とは、恐らく樺太や北海道を訪れ実際にアイヌに接触した欧米人のことであろう。また『人類学研究』と題した自身の著作の中で、当時のヨーロッパ及びアメリカの研究者による「アイヌ人種論」を総覧している。この中で小金井はロシアの民族、地理、動物学者であつたレオポルド・フォン・シュレンクの名前を挙げ、彼の「アイヌ人種論」に概ね同意すると記している<sup>53)</sup>。そのうえで「アイヌ人の形體的の性質と申しますものは、今日生存して居ります色々の人種からは大變に異つて居りまして、詰りどの人種にも當て嵌めることが出来ないといふことだけは確かであらう<sup>54)</sup>と結論付けている。

シュレンクは、アイヌが今あるどの人種にも当てはまらないこと、アイヌの起源が大陸にあつたとみられるがパプア人種に近いとはいえないということ、そしてコーカソイドとモンゴロイドの双方にアイヌと似た点があるが、どちらとも完全一致はしていないということを認めており、小金井はこれらに同意している。加えてシュレンクは、アイヌがアジア人とはるか昔に枝分かれした「古アジア人」の一派ではないかと考えており、大陸からはるか昔に移住し、北方の孤島に居続けたために他人種との混血が進まず、アイヌ固有の特徴を失うことなく今日まで存在している可能性も示唆している。またアイヌにモンゴロイド的な形質がみられる理由については、「アイヌの土地」に日本人が侵入しアイヌが北上、サハリンや千島列島へ進んだことによってアイヌが北方ではギリヤーク、イテリメン（カムチャッカ半島の先住民族）、カムチャダール（イテリメンの別称）らと混血、一方、南方では日本人と混血した結果とみなしているようである。ここでシュレンクは、アイヌが朝鮮半島を経由して日本に侵入したと考え、アジアにアイヌの遺構やアイヌ人種系統を探るのであれば朝鮮を調べる必要があると考えたのであつた<sup>55)</sup>。

これらシュレンクの考えを受けて小金井はアイヌの痕跡が大陸に残っているとすれば朝鮮半島しかありえないと考えたようだが、それに対して「20年待ったが、期待は失敗した<sup>56)</sup>と記し、日本人考古学者によって朝鮮半島の調査が行われたものの成果がなかったことを明らかにしてい

る。小金井によれば、日本各地にみられる石器時代のアイヌによる遺跡は朝鮮半島にはみられず、朝鮮海峡を境にその向こうには存在しないことが確認されたとして、朝鮮半島にみられる石器時代の遺跡はアイヌと異なるものであり、むしろ日本の弥生時代の遺跡に近かったようである。またアイヌの遺跡は弥生時代の遺跡よりも古い印象を受けると記述している<sup>57)</sup>。

そしてさまざまな研究者による「アイヌ人種論」を総覧した上で、小金井は「アイヌと他民族の血統や関係に関して見出された考えは科学的根拠に乏しく、まだ仮説にすぎない。今までに得られた結果からいえることは、アイヌは現在の居住地に人種的な孤島を形成していると言うほかない<sup>58)</sup>」というものであった。そして、この小金井の論は「人種孤島 (Rasseinsel) 説」と名付けられた。

## (2) A・F・チェンバレンによる「アイヌ人種論」

アレクサンダー・フランシス・チェンバレン (1865-1914) はイングランド生まれのカナダの人類学者である。マサチューセッツのクラーク大学に在籍していた時代に人類学者フランツ・ポアズに師事し博士号を取得している。

ポアズはアイヌがコーカソイドであるという考えに疑いを持っていなかった一方で、モンゴロイドに囲まれた地域にアイヌが飛び地的に分布している事実を不思議に考えていた学者であった。「ポアズはコーカソイドをモンゴロイドの一部として、主要なエスニック・グループを2つに減らすべきだとされ考えた<sup>59)</sup>」ことが明らかにされているのである。

モンゴロイドに囲まれるアイヌがコーカソイドであることを実証するために、コーカソイドが主要なエスニック・グループの一角を構成するものではなく、モンゴロイドの亜種であると考えたということである。これは他の「アイヌ=コーカソイド説」と比較しても突飛といわざるをえないものであり、ポアズ以外に同じ考えをした学説は発見できていない。したがって、ポアズによる考えの域を出ないものであろうと推察されるが、この頃の欧米において「アイヌ=コーカソイド説」が強く確信されていたことがうかがえるエピソードである。

チェンバレンによって1912年に発表された論文「日本の民族」の冒頭では、「日本人はある意味で最も新しい人種のひとつである<sup>60)</sup>」と述べられている。すなわち本論文は、白人を中心とした国際社会に驚きをもって迎えられた「日本人という新たな人種」に対する考察が述べられているものである。

日本人はその小柄な体格を理由として、「知性に関してはモンゴロイドの頂点に立つものの、19世紀末を迎えるころには身体的には最底辺に位置していた<sup>61)</sup>」という評価を受けており、白人たちは日本が台頭してくるとは考えていなかったようである。しかしそれに反して日本は日露戦争において白人国家であるロシア帝国を破ってしまったのであった。ドイツの医師であったウェルニヒ (1843-1896) が述べた「(日本人の) 筋肉や消化器系の活動不足によって生じるいくつかの特異性を発見した。それは不足する栄養摂取によるもので、知性への影響はその他の身体からくる遺伝によるものであると認められる<sup>62)</sup>」に対して、ポアズが述べた「近代における発展やロシアとの衝突において日本人がエネルギーや忍耐力を見せたあとでは、彼 (ウェルニヒ) の結論はどれほど脆弱に見えることか!」<sup>63)</sup>という見解は、当時の多くの欧米人研究者の見解にも当てはまるものであったとチェンバレンは述べている。ヘネシーは同じように人種間戦争という見方があった日露戦争において、日本がロシアに勝利したという白人社会が受けたショックを、日本人の中にあろうアイヌの血 (白人性) をもって理解し納得しようとした可能性についても言及

している<sup>64)</sup>。

またこの論文が興味深いのは、チェンバレンがロシアの代表的な文豪・トルストイの肖像がスラヴ系男性であるにも関わらずアイヌ男性と似ていると一部で指摘されていることに言及していることである。チェンバレンは「アイヌに存在すると疑われた「コーカソイド性」はアーリアファイル（アーリア至上主義者）やアーリアマニアクス（アーリア狂）らによって作られたものである。彼らはいくつかの人種を認めておらず、世界で何かを成し遂げるには最低限でも「白人」であることが必要で、「アーリア人」であるとより望ましいとしているのである<sup>65)</sup>と指摘したうえで、「コーカソイドやアーリア人の特徴がアイヌを伝わって現日本人にみられるというのは疑わしい。アイヌはコーカソイドともアーリア人とも白人とも考えられないため、これらの文化的意味においてアイヌに「コーカソイド性」があるといわれるのは、日本人の近年における功績や現在の文化事象を説明するためである<sup>66)</sup>と述べている。そしてアイヌを「彼らはプレ=コーカソイド（先コーカソイド）というよりむしろプロト=コーカソイド（原コーカソイド）である<sup>67)</sup>とまとめている。

結論として、チェンバレンは「アイヌ=コーカソイド説」を明確に否定した上で、現日本人についても「多少変化が加えられたモンゴロイドであり、偉大な他人種と同じ「混成民族」である」と結論づけている<sup>68)</sup>。

その一方で、アイヌが一時は日本全域に居住しており今日存在する現日本人の祖先であるという言説に対しては一切の疑いを持っていないようであり、「彼ら（現日本人）の直接的な祖先はアイヌであり、アイヌは原始的な民族で未だ蝦夷、サハリン、クリルの一部に生き残っている<sup>69)</sup>とも述べている。また日本人起源論に関してコロボックルはエスキモーの一派であると考えた坪井に対してその論を明確に否定しているほか、「日本の言い伝えにあるコロボックル（kurupokguru）やピグミー（pigmies）はアイヌの祖先であった可能性がある<sup>70)</sup>とも述べている。

第2節では小金井、チェンバレンが共に当時の欧米人研究者による「アイヌ人種論」を詳細に検討した上で、自身の学説を唱えていたことが明らかになった。特にチェンバレンの研究には「アイヌ=コーカソイド説」が文化的に支持された可能性についての言及が多くみられる。また小金井はシュレンクの考えに同意した上で、人種孤島説と名付けた新たな学説を生み出したのであった。2人は「アイヌ人種論」と共に、日本人起源論にも言及しており「アイヌ人種論」が日本人の起源に対する関心と深い関わりがあったことが改めて明らかになった。加えてチェンバレンは日本人起源論がヨーロッパを舞台に議論されるようになった理由として、日露戦争をきっかけとして白人が覇権を握っていた世界に台頭してきた「日本というアジア人近代国家の特異性」についても述べており、当時の白人たちが受けた衝撃の大きさがみてとれよう。

## おわりに

第1節で検討した論文を総覧した結果、19世紀から20世紀にかけて欧米人研究者によって発表された論文で支持された「アイヌ人種論」においては「アイヌ=コーカソイド説」が占める割合が最も大きいことが改めて明らかになった。先行研究で指摘されていた通り、「アイヌ=コーカソイド説」は長きにわたって広く支持されていたことが確認された。しかし、その一方で先行研

究では言及されなかった「アイヌ=南方起源説」（児玉によれば「オセアニア人種説」）を唱えた研究者もみとめられたほか、明確に結論を出していない研究者や論文も存在したのである。すなわち、この時代における「アイヌ人種論」は必ずしも「アイヌ=コーカソイド説」に統一されていたわけではなく、南方起源説やモンゴロイド説、また不明とするものなどさまざまな考えが乱立していたのである。

またそれぞれの「アイヌ人種論」を詳細に検討していった結果、「アイヌ=モンゴロイド説」や「アイヌ=南方起源説」は地理的要因や、アイヌの祖先となった集団の移動ルートの推察の根拠に基づいて論じられていたことが明らかになった。その一方で、「アイヌ=コーカソイド説」の根拠はその多くが毛深さや顔のパーツの特徴などであることも明らかになった。「アイヌ=コーカソイド説」で最もよく用いられた根拠は頭蓋骨の精密な測定を行うことであり、その数値から人種が推定できるという、ワイダイエルが広めた形質人類学的手法による証明であった。今日においては科学的根拠に基づくとは認められないこのような研究手法が、当時においては非常にポピュラーかつ非常に科学的に認められたものであったことがうかがえよう。

このようにそれぞれの「アイヌ人種論」が異なる根拠と結論を導き出していた一方で、これらが互いに議論しあっていないこともまた興味深い。それぞれの研究者らは自らの考えを補強、実践することに注力しており、自身の考えと異なる学説を否定する記述がほとんど確認されないのである。近代欧米を舞台に多数の研究者を巻き込んで繰り広げられたはずの「アイヌ人種論」には、それぞれの学説どころか個々人の研究者レベルに至っても、対立構造が全くといってよいほどみられないのである。

すなわちそれぞれの「アイヌ人種論」は相互に作用せず、個々の研究手法と信念に基づいて個別に発表され続けていたとみるべきであろう。それぞれが異なる学術体系のなかで異なる発想、研究手法を用いて学説を発表し続けた結果、「アイヌ人種論」史を整理してもそれらに体系的なまとまりがみとめられるに至らなかったのである。

このように19世紀から20世紀初頭に繰り広げられた「アイヌ人種論」は、日本国内で巻き起こった日本人起源論という文脈のなかとは異なる道程を歩んでいたものであった。またこれらの学説は論争とは呼び難いものであり、それぞれが異なる文脈、発想、研究手法の中で個別に発表されたものでそのなかに体系は見いだせなかった。研究史を整理した小金井とチェンバレンが最終的にアイヌの起源や人種についての明言を避けたのは、こうした人類学における論争の不在やバラバラな研究手法の問題があったためであろうと推察される。

---

## 注

- 1) 一橋大学社会学部貴堂ゼミ&院ゼミ有志『大学生がレイシズムに向き合って考えてみた』明石書店、2023年、52頁。
- 2) 同上。
- 3) 寺田和夫「人種の分類と分布」『人種』雄山閣出版、1977年、147頁。
- 4) ハンス・ディッター・オイルシュレーガー（松野義明訳）「ヨーロッパにおけるアイヌ民族コレクション」『小シーボルトと日本の考古・民族学の黎明』同成社、2001年、237頁。
- 5) ロテム・コーネル（滝川義人訳）『白から黄色へ ヨーロッパ人の人種思想から見た「日本人」の発見』明石書店、2022年、138頁。

- 6) ハインリッヒ・フォン・シーボルト（原田信夫、H. スパンシチ、J. クライナー注訳）『小シーボルト蝦夷見聞記』東洋文庫、1996年、19頁。
- 7) コーネル、前掲『白から黄色へ』138頁。
- 8) 同上。
- 9) ハンス・ディッター・オイルシュレーガー（松野義明訳）「文化人類学者による日本考察—ドイツ語圏学術界における日本文化・社会の民族学的調査研究—」『小シーボルトと日本の考古・民族学の黎明』同成社、2011年、147頁。
- 10) 同上。
- 11) 小谷凱宣「明治時代のアイヌ・コレクション収集史再考—国外アイヌ・コレクションの調査結果から—」『国立歴史民俗博物館研究報告』107集、国立歴史民俗博物館、2003年、39頁。
- 12) ヨーゼフ・クライナー「ヨーロッパ人の抱いたアイヌ観とヨーロッパにおけるアイヌ研究」『欧米のアイヌ・コレクションの比較研究』名古屋大学大学院人間情報学研究所、1997年、9頁。
- 13) 同上、16頁。
- 14) 同上、19頁—20頁。
- 15) 埴原和郎『日本人の成り立ち』人文書院、1995年、22頁。
- 16) 尾本恵一「アイヌの遺伝的起源」『日本研究』第14集、国際日本文化研究センター、1996年、204頁。
- 17) John L. Hennessey, “Overlooking whiteness? Discourses of race and primitiveness in accounts of the Ainu by Benjamin Douglas Howard and Henry Savage Landor”, in: *History and Anthropology*, Online published in 2023, p.5.
- 18) 石田肇「琉球人、アイヌ民族、そして日本人」『日本病理生理学雑誌』15号、2006年、30頁。
- 19) Albert S. Bickmore, “The Ainos, or Hairy of Yesso”, in: *American Journal of Science and Arts*, Second Series Vol.45, 1868, p.358-359.
- 20) Ibid, P.360.
- 21) Ibid.
- 22) Ibid, P.361.
- 23) George Busk, “Description of an Aino Skull”, in: *Transactions of the Ethnological Society of London*, Vol.6, 1868, p.109.
- 24) Ibid, pp.110-111.
- 25) 埴原、前掲『日本人の成り立ち』22頁。
- 26) Joseph Barnard Davis, “Description of the skeleton of an Aino woman, and of Three Skulls of men of the same race”, in: *Memories read before the Anthropological Society of London*, Vol.3, 1870, p.30.
- 27) Ibid, p.32.
- 28) Ibid, pp.38-39.
- 29) Vivien de Saint-Martin, „L’ethnologie de Grand Archipel d’Asie. Une lacune à remplir dans la classification des races humains“, in: *L’année Géographique*, Vol.9, p.94.
- 30) Ibid, p.95.
- 31) Ibid, p.97.
- 32) 小金井良精『人類学研究』大岡山書店、1926年、389頁。
- 33) M. M. ドプロトウォルスキイ（寺田吉考、安田節彦訳）『M. M. ドプロトウォルスキイのアイヌ語・ロシア語辞典』共同文化社（原著1875）、2023年、29頁。
- 34) 埴原、前掲『日本人の成り立ち』23頁。
- 35) 小金井、前掲『人類学研究』469頁。
- 36) 同上、390-391頁。
- 37) Ludwig Stieda, „Mittheilungen aus russischen Literature“, in: *Archiv für Anthropologie*, Deutsche Gesellschaft für Anthropologie, Ethnologie und Urgeschichte, Bd.10, 1876, pp.441-442.
- 38) ハインリッヒ・フォン・シーボルト『考古説略』ハインリッヒ・フォン・シーボルト、1879年、14-16頁。
- 39) シーボルト、前掲『小シーボルト蝦夷見聞記』26頁。
- 40) 吉岡郁夫、長谷部学『ミルンの日本人種論 アイヌとコロボクグル』雄山閣、1993年、110頁。

- 41) 前掲、吉岡、長谷川『ミルンの日本人種論』、110頁。
- 42) 同上。
- 43) 工藤雅樹『研究史：日本人種論』吉川弘文館、1979年、67頁。
- 44) Rotem Kowner and Walter Demel, “Race and Racism in Modern East Asia: Western and Eastern Constructions”, Brill, 2014, pp.105-106.
- 45) Tarenetzky, „Beiträge zur Coronologie der Ainos auf Sachalin.“, Mémoires de l’Académie impériale des sciences de St. Pétersbourg, 7e Serie, Tome37, No.13 et dernier, 1880, p.1.
- 46) Ibid, p.3.
- 47) Ibid, pp.45-46.
- 48) Kowner and Walter, op. cit., p.418.
- 49) Ibid, p.417.
- 50) 高橋潔「1888年の北海道旅行——坪井正五郎・小金井良精の人類学的調査」『考古学史研究』京都木曜クラブ、7号、1997年、72頁。
- 51) Kowner and Walter, op. cit., p.417.
- 52) Koganei Yoshikiyo, „Zur Frage der Abstammung der Aino und ihre Verwandtschaft mit anderen Völkern“, in: *Anthropologischer Anzeiger*, Jahrg.4, H.3, 1927, p.201.
- 53) 小金井、前掲「アイノ人種に就いて」401頁。
- 54) 同上。
- 55) 同上、397-398頁。
- 56) Koganei, op. cit., p.202.
- 57) Ibid.
- 58) Ibid, p.207.
- 59) ルース・ベネディクト（阿部大樹訳）『レイシズム』講談社学術文庫、2020年、46頁。
- 60) Alexander Francis Chamberlain, “The Japanese Race”, in: *The Journal of Race Development*, vol.3, no.2, 1912, p.182.
- 61) Ibid, p.177.
- 62) Ibid.
- 63) Ibid.
- 64) Hennessey. op. cit. p.2.
- 65) Ibid.
- 66) Ibid.
- 67) Ibid.
- 68) Ibid.
- 69) Ibid, p.178.
- 70) Ibid.

- i 小金井以降の日本の人類学者らが著したアイヌの人種に関する論考はもっぱら日本人起源論の文脈の中で触れられるものである。したがって、本論文では「アイヌ人種論」に主眼を置いた小金井までの研究者らを取り上げるに留めている。
- ii この他にも日本人人類学者の児玉作左衛門も「アイヌ人種論」の総覧を自身の著作において行っている。「アイヌの人種分類問題」の項でモンゴロイド説、コーカソイド説、オセアニア人種説、古アジア民族説、人種孤島（Rasseninsel）説の5つを挙げてそれぞれを支持した学者に分類しており、その中で自身をコーカソイド説の項に挙げている。そこで「長頭族である点においてアイヌはモンゴロイドよりもヨーロッパ人に近い」と述べ、また「一般的に骨格は進化を示すものであり、アイヌの骨格は現代のヨーロッパ人よりも一層原始的である」とも記している。その一方で冒頭では、現時点においてはアイヌの起源や人種分類は仮説の域を出ないものであるとも述べられているに留まるのであった。

## 参考文献一覧

## 《欧語一次史料》

- Bickmore Albert S., “Some Notes on the Ainos”, in: *Transactions of the Ethnological Society of London*, Vol.7, 1869, pp.16-26.
- Bickmore Albert S., “The Ainos, or Hairy of Yesso”, in: *American Journal of Science and Arts*, Second Series Vol.45, 1868, pp.353-361.
- Busk George, “Description of an Aino Skull”, in: *Transactions of the Ethnological Society of London*, Vol.6, 1868, pp.109-111.
- Chamberlain Alexander Francis, “The Japanese Race”, in: *The Journal of Race Development*, vol.3, no.2, 1912, pp.176-182.
- Davis Barnard J., “Description of the skeleton of an Aino woman, and of Three Skulls of men of the same race”, in: *Memories read before the Anthropological Society of London*, Vol.3, 1870, pp.21-40.
- Saint-Martin Vivien de, „L’ethnologie de Grand Archipel d’Asie. Une lacune a remplir dans la classification des races humanies“, in: *L’Année Geographique*, vol.9, 1872, pp.90-97.
- Sakuzaemon Kodama “AINU: Historical and Anthropological Studies”, Hokkaido University School of Medicine, 1970.
- Schrenck L. von, „Reisen and Forschung im Amurland in den Jahren 1854 bis 1856“, in: *Die Völker des Amurlandes*, Bd.3, 1, 1881.
- Ludwig Stieda, „Mittheilungen aus russischen Literature“, in: *Archiv für Anthropologie, Deutsche Gesellschaft für Anthropologie*, Ethnologie und Urgeschichte, Bd.10, 1876, pp.434-453.
- W. Döenitz, „Bemerkungen über Aino“, in: *Mittheilungen (Bände 1873-1876)*, Bänd1, Heft6, Deutschen Gesellschaft für und Völkerkunde Ostasiens, 1873, pp.61-67.
- Yoshikiyo Koganei, „Zur Frage der Abstammung der Aino und ihre Verwandtschaft mit anderen Völkern“, in: *Anthropologischer Anzeiger*, Jahrg.4, H.3, 1927, pp.201-207.

## 《欧語二次文献》

- Hennessey John L., “Overlooking whiteness? Discourses of race and primitiveness in accounts of the Ainu by Benjamin Douglas Howard and Henry Savage Landor”, in: *History and Anthropology*, Online published in 2023.
- Hennessey, John L., “The recurring “discovery” of Hokkaido and the Ainu: three decades of nineteenth-century British travelogue”, in: *Nineteenth-Century Contexts*, Vol.45, Issue3, Online published in 2023.
- Kowner Rotem and Demel Walter, “Race and Racism in Modern East Asia: Western and Eastern Constructions”, Brill, 2014.

## 《日語一次史料》

- 小金井良精『日本石器時代の住民』春陽堂、1904年。
- 小金井良精『人類学研究』大垣書店、1926年。
- 小金井良精「アイノ民族、其の起源並に他民族との関係」『人類学雑誌』42巻5号、日本人類学会、1927年。
- 小金井良精『人類学研究 続編』小金井博士生誕百年記念会、1958年。
- シーボルト、ハインリッヒ、フォン（原田信男、H. スパンシチ、J. クライナー注訳）『小シーボルト蝦夷見聞記』東洋文庫、1996年。
- シーボルト、ハインリッヒ、フォン『考古説略』ハインリッヒ・フォン・シーボルト、1879年。
- ドブロトウォルスキ、M. M.（寺田吉考、安田節彦訳）『M. M. ドブロトウォルスキのアイヌ語・ロシア語辞典』共同文化社（M. M. Добротворский, Добротворский, КАЭАНЪ, 1875）、2023年。

## 《日語二次文献》

- 青木健『アーリア人』講談社選書メチエ、2009年。
- 石田肇「琉球人、アイヌ民族、そして日本人」『日本病理生理学雑誌』15号、2006年。
- オイルシュレーガー、ハンス・ディター（松野義明訳）「ヨーロッパにおけるアイヌ民族コレクションーそ

- の民族学的意義と西洋のアイヌ観への影響』『小シーボルトと日本の考古・民族学の黎明』同成社、2001年。
- オイルシュレーガー、ハンス・ディター（松野義明訳）「文化人類学者による日本考察—ドイツ語圏学術界における日本文化・社会の民族学的調査研究—」『小シーボルトと日本の考古・民族学の黎明』同成社、2001年。
- 尾本恵一「アイヌの遺伝的起源」『日本研究』第14集、国際日本文化研究センター、1996年。
- 工藤雅樹『研究史：日本人種論』吉川弘文館、1979年。
- クライナー、ヨーゼフ「アイヌ文化研究：ヨーロッパにおけるアイヌ関係のコレクションの歴史と現状」『国立民族学博物館研究報告別冊5号ピウスツキ資料と北方諸民族文化の研究』国立民族学歴史博物館、1987年。
- クライナー、ヨーゼフ『日本民族学の現在—1980年代から90年代へ—』新曜社、1996年。
- クライナー、ヨーゼフ「ヨーロッパ人の抱いたアイヌ観とヨーロッパにおけるアイヌ研究」『欧米のアイヌ・コレクションの比較研究』名古屋大学大学院人間情報学研究科、1997年。
- クライナー、ヨーゼフ編『小シーボルトと日本の考古・民族学の黎明』同成社、2001年。
- 小谷凱宣『アイヌ文化の形成と変容』名古屋大学大学院情報学研究科、1996年。
- 小谷凱宣『欧米のアイヌ・コレクション』名古屋大学大学院情報学研究科、1997年。
- コーネル、ロテム（滝川義人訳）『白から黄色へ—ヨーロッパ人の人種思想から見た「日本人」の発見』明石書店、2022年。
- 坂野徹『縄文人と弥生人「日本人の起源」論争』中公新書、2022年。
- 桜井奈穂子「小金井良精とワイダイエル先生—蔵書票をめぐる旅」『長岡郷土史』46号、長岡郷土史研究会、2009年。
- 佐治美咲「近代ドイツにおけるアイヌへの関心」『人間文化』53号、神戸学院大学人文学会、2023年。
- シドル、リチャード『アイヌ通史：「蝦夷」から先住民へ』岩波書店、2021年。
- 瀬川拓郎『アイヌ学入門』講談社現代新書、2015年。
- 関根達人『つながるアイヌ考古学』新泉社、2023年。
- 高橋潔「1888年の北海道旅行——坪井正五郎・小金井良精の人類学的調査」『考古学史研究』京都木曜クラブ、7号、1997年。
- 寺田和夫「人種の分類と分布」『人種』雄山閣出版、1977年。
- 一橋大学社会学部貴堂ゼミ&院ゼミ有志『大学生がレイシズムに向き合って考えてみた』明石書店、2023年。
- 埴原和郎「二重構造モデル：日本人集団の形成に関わる一仮説」『Anthropological Science』102巻5号、The Anthropological Society of Nippon、1994年。
- 埴原和郎『日本人の成り立ち』人文書院、1995年。
- バーリー、マーク・ヴィッパーマン、ヴォルフガング（柴田敬二訳）『人種主義国家ドイツ 1933-45』刀水書房、2001年。
- 平野千果子『人種主義の歴史』岩波新書、2022年。
- ベネディクト、ルース（阿部大樹訳）『レイシズム』講談社学術文庫、2020年。
- ポリアコフ、レオン（アリア主義研究会訳）『アリア神話—ヨーロッパにおける人種主義と民族主義の源泉』法政大学出版局、1985年。
- 吉岡郁夫、長谷部学『ミルンの日本人種論—アイヌとコロポクグル』雄山閣、1993年。